

§ 8 心の哲学 (その2)

参考文献

- ・ジョン・サール『マインド』山本貴光・吉川浩満訳、朝日出版社
- ・ジョン・サール『ディスカバー・マインド』宮原勇訳、筑摩書房
- ・Wikipedia「心の哲学」

1 心脳関係に関する主な立場

- (1) 二元論 (Dualism) : 物心二元論の諸形態
- (2) 一元論 (Monism) の諸形態 : 唯心論、唯物論 (物理主義)、中性的一元論
- (3) 物理主義の諸形態 : 同一説、機能主義、消去主義、非還元的物理主義

2、物理主義批判の可能性

- (1) クオリアとは何か (参照 : 「クオリア」 wikipedia)
- (2) クオリアが存在するなら、物理主義は間違いだ
- (3) クオリアは存在するのか

3 物理主義で志向性を説明できるか？

(前回ここまで)

4、非還元的物理主義 (nonreductive physicalism) : デイヴィドソン (Donald Davidson)

の非法則的一元論 (anomalous monism)

参考文献 : デイヴィドソン著『行為と出来事』服部裕幸、柴田正良訳 (勁草書房)
第8章「心的出来事」

(1) デイヴィドソンは、「非法則論的一元論」を主張する。

「非法則論的一元論」とは、次の三つの原理がともに成り立つと主張する立場である。

- ①「因果的相互作用の原理」= 「少なくともいくつかの心的出来事は物的出来事と因果的に相互作用し合う」(訳 263) 例えば、「身体的運動」や「知覚」がそうである
- ②「因果性の法則論的 (nomological) 性格」= 「因果性が存在するところには法則が存在しなければならない」(訳 264)
- ③「心的なものの非法則性」= 「心的出来事を予測したり説明したりするための根拠となる厳格な決定論的法則は存在しない」(訳 264)

一見すると、これらの三つの原理を同時に受け入れることは、矛盾するように見える。

①と②は矛盾しないように見えるが、③を加えると矛盾するようになる。

②と③は矛盾しないように見えるが、①を加えると矛盾するようになる。

③と①は矛盾しないように見えるが、②を加えると矛盾するようになる。

しかし、デイヴィドソンは、<この三つの原理をすべて認めても、矛盾しない>と主張する。

<用語の説明>

「出来事」＝再現不可能な、特定の時刻を割り当てられた個体」（訳 266）

「心的出来事」＝「心的用語によって記述可能である出来事」

「物的出来事」＝「純粹に物的な語によって記述可能である出来事」 267

<心的出来事と物的出来事の間に関する四つの理論>

法則論的一元論(nomological monism)：唯物論

法則論的二元論(nomological dualism)：心身平行説、心身相互作用説、随伴現象説

非法則論的二元論(anomalous dualism)：デカルト主義

非法則論的一元論(anomalous monism)：ファイグル、シューメイカー、テイラー、ナーゲル、ストローソン、デイヴィドソン

(2) ①②③の全てを認めることから生じる矛盾

②と③からは、④が帰結するだろう。

②「因果性の法則論的(nomological)性格」＝「因果性が存在するところには法則が存在しなければならない」

③「心的なものの非法則性」＝「心的出来事を予測したり説明したりするための根拠となる厳格な決定論的法則は存在しない」

④「厳格な心理・物理学的法則は存在しない」 (287)

が帰結する。

しかし、①と②からは、④の否定が帰結するだろう。

①「因果的相互作用の原理」＝「少なくともいくつかの心的出来事は物的出来事と因果的に相互作用し合う」

②「因果性の法則論的(nomological)性格」＝「因果性が存在するところには法則が存在しなければならない」

④の否定「心的出来事と物的出来事の間には、法則が存在しなければならない」が帰結するだろう。

①と④の否定は、矛盾する。

(3) この矛盾の解消

この矛盾は次のように考えるときに解消する。

(a) 心的出来事と物的出来事は同一である。(①と「物理的領域の因果的閉包性」より)

②物的出来事は法則的である

③心的出来事は非法則的である。

この3つが同時に成立しているとすれば、次が成り立つ。

(b) 心的出来事と物的出来事はタイプ同一でなく、トークン同一である。

「ある心的出来事はある物的出来事と同一であると知りながらも、しかし、それ [その対応する物理的出来事] がどの出来事であるかを (その出来事をしかるべき法則の下に包摂する一意的な物的記述を、その出来事に与えることが出来るという意味においては) 知らないという場合があることがわかる。したがって世界の物的歴史を全て知り尽くし、しかも、あらゆる心的出来事が物的出来事と同一であるとしても、そのことから、唯一の心的出来事 (もちろん、そのように記述されたものとしての心的出来事) さえも、それを予測あるいは説明しようということは帰結しないのである。」 290

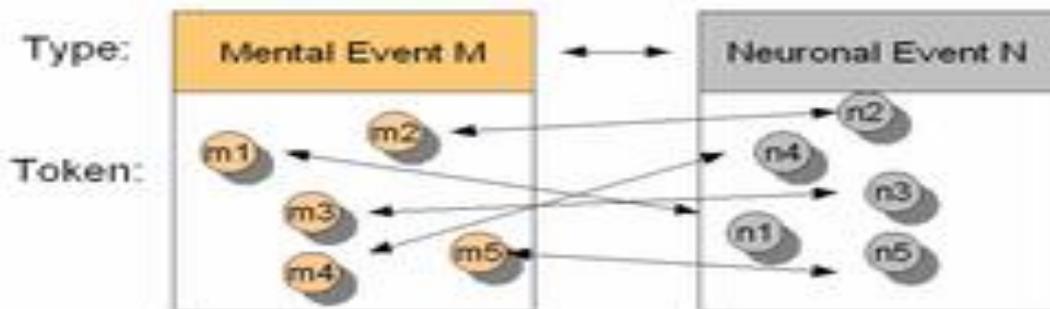
(4) トークン同一説による説明

古典的同一説 (タイプ同一説) と非法則的一元論のトークン同一説の対比:

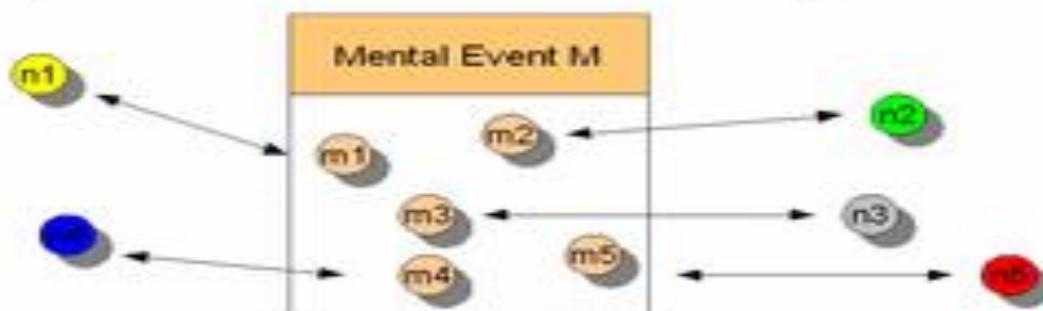
同一説からすると、あるひとつの心のタイプを構成するすべてのトークンが、ひとつの物理的タイプを構成する物理的トークンのひとつひとつに対応 (矢印で示している) している。一方、非法則的一元論によれば、タイプの間に対応関係にトークンの間に対応関係は縛られない。残るのはトークンレベルの同一性だけである。(「心の哲学」Wikipediaより)

物理状態のタイプに、心的状態のタイプがスーパーヴィーン (supervene, 付随する) するのではなくて、物理的状态のトークンに、心的状態のトークンがスーパーヴィーンする。

A) The Identity Theory: Type and Token



B) Anomalous Monism: Token Without Type



5 ジェグウォン・キム (Jaegwon Kim) の物理主義

(参考文献：ジェグウォン・キム著『物理世界のなかの心』太田雅子訳、勁草書房)

キムは、心の志向性については、デイヴィッドソンの非法則的一元論を批判して、還元主義的物理主義を主張するが、クオリアに関しては、非還元主義的物理主義をとる。（『物理世界のなかの心』第4章）

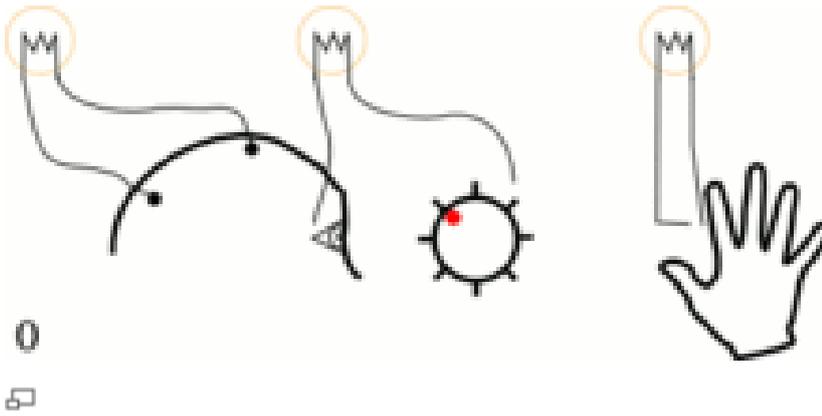
キムは、志向性（機能主義的に捉えられる心の働き）については、タイプ同一説で説明するだろう。クオリアに関しては非還元主義をとるが、デイヴィッドソンのようなトークン同一説を採るのかどうかは、『物理世界のなかの心』では明示されていない。

6 ベンジャミン・リベット(1916～ 2007)の実験

(参照：ベンジャミン・リベット『マインド・タイム』（原書 2004）下條信輔訳、岩波書店、2005)

(1) リベットの实验

・ Libet, B., Gleason, C. A., Wright, E. W., and Pearl, D. K. (1983). Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential). The unconscious initiation of a freely voluntary act. *Brain*, 106:623-642.



Libet's experiment:

0 repose

1 (-500 ms) EEG measures Readiness potential

2 (-200 ms) Person notes the position of the dot when decides

3 (0 ms) Act

被験者は、机にすわって、オシロスコープの時計を見る。彼の頭の運動皮質(motor cortex)に電極がつけられている。被験者は、時計を見ながら、自由にボタンを押すことができる。実験は何回でもすることができるが、被験者は、ボタンを押そうと思ったときの時計の針の位置を覚えておかなければならない。実際にボタンを押した時間は、自動的に図られる。するとボタンを押そうと思ってから、実際にボタンを押すまで200ミリ秒かかる。しかし、ボタンを押すよりも500ミリ秒前に脳の運動皮質につけられた電極は反応する。つまり、被験者がボタンを押そうと意図するよりも300ミリ秒まえに運動皮質が活性化している。行為の意識的な決定には、脳内での電荷の無意識的な蓄積が先行している。この蓄積は、準備電位 ([readiness potential](#)) と呼ばれる。

=====

ミニレポート課題

1、自由意志を認めない人は、デイヴィドソンのトークン同一説による非還元的物理主義に対する意見を書いて下さい。

2、自由意志を認める人は、リベットの試験に対して、自由意志をどのように擁護するか述べてください。

3、今日の講義内容に関連して、できるだけ根源的な哲学的な問いを立ててください。

=====

